

海に沈んだ宝物 水中文化遺産



中国などからもたらされた陶磁器(長浜港跡)



採集された中国産陶磁器(安富祖川河口)



海底の先史時代の土器(南恩納海岸)



中国、沖縄の陶磁器(ビル港跡)

海や湖底に沈んだ文化財を水中文化遺産とも呼ばれています。水中文化遺産には沈没船や積荷、石切場跡、魚垣、水底に沈んだ遺跡などがあります。今回は、恩納村の水中文化遺産をご紹介します。

恩納村は西海岸に面した南北に細長い地形の村で、ほとんどの集落で周辺に河川がながれています。昔から川は暮らしの中で水源として利用するだけでなく港または物資の運搬路等にも利用していることがわかっています。恩納村教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査では、村内の各河口から海岸一帯を中心に歩いて昔の道具があるかどうかの確認踏査を実施しています。その結果、村内の海底や川底から昔の道具が発見されました。発見された場所は港跡と考えられる場所で、発見された道具は約500～300年前に中国やタイなどでつくられた外国産の陶磁器や本土で焼かれた陶器などで海を越えてきた道具たちです。沖縄の史料「琉球国旧記」によると恩納間切には名嘉真江、名嘉真港、安富祖港、瀬良垣港、恩納港、内那唎港、谷茶江、谷茶港北、谷茶港南、仲泊港、外川港、山田江、久良波江、真栄田港、比留港の11港4江があったとされ、恩納村だけでも多くの港があったことがわかります。モノの運搬の玄関口としての港から集落にもたらされた道具からいつ、どこから、どのようなものがもたらされたかを調べることでご先祖様たちの生活について知ることができます。



中国、沖縄の陶磁器(南恩納海岸)



中国産陶磁器(当袋川)



恩納 当袋川河口(港跡)

(文化係文化財担当 崎原)

平成27年度 恩納村博物館講座「バーキ作り」を開催しました。

11月28日、29日の2日間にわたり、博物館ピロティにて恩納村博物館講座「バーキ作り」を開催しました。恩納村博物館での開催は3回目になりますが、今回は昨年度までの受講生の技術の習熟と新規受講生を募集して開催しました。今回も製作にあたっては、名護博物館を拠点に活動されている「山原ものづくり塾」の塾頭・木下義宣氏をはじめ、会員の方々総勢15名がマンツーマンで熱心に指導してくださいました。

講座の開催に先立ち、11月23日には講師と受講生数名で材料となる竹の切り出し作業を行いました。現地では講師の木下氏から、竹かご作りに使える竹の選び方、切り出し方などの説明と実技指導をしていただきながら、作業を行いましたが、今年度はなかなか竹かごを作るのに向いている竹を見つけることができず、苦勞しました。

講座当日の1日目は前回までと同じく、受講生たち自身で竹を割り、ナタなどを使って、竹ひごを作る作業から取り組みました。その後、2日目にかけて、竹かごを編み、作品を完成させました。新規受講生は初めての作業ばかりでしたが、熱心に講師の指導を受け、難しい作業にも果敢にチャレンジしていました。講師の手助けもあり、各々が素敵な作品を



完成させることができました。今回も大きなケガがなく、無事に講座を終えることが出来ました。

完成した作品は12月1日～12月6日まで、村文化協会のご厚意により、博物館にて開催されていた恩納村文化展の会場にてお披露目させていただきました。多くの来場者の方にご覧いただくことができ、大変好評だったようです。

今回で3回目を迎えた竹かご作りの講座ですが、申込は定員の10名を超え、参加者の決定は抽選にて行いました。講座中や展示中の作品を見た方などから「ぜひ、作ってみたい!」というご要望もありました。しかし、材料となる竹の確保や講師が指導できる人数には限りがあるため、すぐに定員を増やすということもなかなかできません。今後はこうした課題を解決しながら、より良い講座にしていければと考えています。

博物館では次年度以降も継続して、身近な民具である「竹かご」作りの講座の開催を計画しています。『広報おんな』などで、受講生を募集しますので、参加したい!という方は博物館からの案内を見逃さずにチェックしてください。

(学芸員 後藤)

